

尾形亀之助研究：詩と詩法と詩論の軌跡

岩下，祥子

<https://doi.org/10.15017/1806785>

出版情報：九州大学，2016，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏名	岩下 祥子			
論文名	尾形亀之助研究 ―詩と詩法と詩論の軌跡―			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松本 常彦
	副査	九州大学	准教授	波瀲 剛
	副査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	東北大学	教授	佐藤 伸宏
	副査	筑紫女学園大学	教授	松下 博文

論文審査の結果の要旨

本論文は、尾形亀之助の初期から晩期に至る作詩上の問題点について、詩作品の具体的読解や全集未収録資料の発掘と検討を通じて、その詩や詩法や詩論の軌跡を追究し、尾形の詩業の全体像について構想する内容になっている。

論文の構成は、序論、本論、結論から成る。

序論では、尾形の略伝を確認し、先行研究の概要紹介と問題点の整理を行い、大きな問題として詩作する主体としての「私」という問題があることを指摘する。その問題に対し、主体と対象との距離、距離の表現、詩への態度という視点などから分析を試みる事が提起されている。

本論は、初期から晩年までの詩の変遷に沿う七章から構成されている。

第一章は、第一詩集『色ガラスの街』（1925）所収の詩「私は待つ時間の中に這入つてゐる」について、当時の日本におけるアインシュタインの紹介者であった石原純を經由しての相対性理論受容の可能性を検討し、主体や時空を重層的に把握する構造から尾形の詩の具体的な解読を試みる。

第二章は、日本モダニズム期に画家としても活動した尾形が、『色ガラスの街』に収めた「白い手」という詩作品について、それが「三越」という広告雑誌にも掲載されていることに注目し、その際に添えられた画との関係から詩を分析し、さらに画中に記された魚のイメージが詩誌「亜」の表紙にも採用されている点から、尾形に詩画の方法意識があったことを指摘・検討している。

第三章は、「詩集『鶴』を評す」（1929）という室生犀星批判の文章を例に、まとまったかたちで詩論を書かなかった尾形の詩論を構想するモデルを提供している。

第四章は、尾形が自分の周囲にいた中村漁波林と黄瀛について述べた文章から、当時の詩壇における尾形の間人関係や詩人観を検討し、詩人の交流圏を明らかにしている。

第五章は、全集未収録の座談会資料を用いて、当時の現代詩や流行する詩的意匠についての尾形の認識を、かつて「童心」論争を展開した北川冬彦の発言と対比することで析出し、尾形の詩観や詩人観の特色として、詩それ自体に先行する形式や社会性を認めない姿勢を指摘している。

第六章は、野村吉哉の詩集の批評文「日本英傑伝抄と野村君」と私」（1927）と小説「在郷詩人之図」（1933）というともに全集未収録資料を対比的に考察することを通じて、詩から小説へという晩期の創作意識を検討し、詩人としての退嬰という従来の晩期についての評価に再考を迫る視点を提示している。

第七章は、尾形の晩期の詩「浅冬」について、第五章でも問題になった「童心」論争の文脈などを導入しつつ、詩に表現された私と対象（子ども）との関係や距離、その距離の表現としての詩と

いう視点から具体的な読解を提示している。

結論では、尾形の詩と方法の変遷と軌跡を確認しつつ、その詩の営みや詩性の中心に「私」という問題があり、「私」と対象との距離や関係、詩人の詩に対する態度などが詩の表象の軸にあり、それを中心に尾形の詩が展開してきたことを確認している。

本論文は、上記を通じて、①尾形の詩業の全体像を把握するための視点を提供し（第一、二、六、七章）、②二度にわたって刊行された全集でも未収録であった資料を発掘し、その資料の価値や意義を論文として提示し（第二、四、五、六、七章）、③詩論のかたちで文章を残していない尾形の詩論や詩観を窺う方法を提供し（第三、四、五章）、④「資料編」として現在最も整備された「尾形亀之助著作目録」を作成している。

以上の点から、論文調査委員会では全員一致で、本論文が比較社会文化学府の博士（比較社会文化）の学位論文として十分な水準にあると判断した。